

I N C U B E S X
S U C C U B E S





目醒めなければ夢と現実には差などない。

そんな風に謂うけれど、夢は夢だろう。目醒めないことなどないから、夢は必ず終わる。それに、目醒めてしまえば夢は急激に遠ざかる。ついさつき見ていたはずの夢も、まるで百年も前の記憶のように霞んでしまう。そもそも、起きてから覚えている夢の方が少ないくらいだ。覚えていたって断片でしかないし、繋がっていたって支離滅裂で無茶苦茶で矛盾だらけで間違いだらけで出鱈目で、およそ現実とは思えない。

夢を見ている時は、それでも変だと思わない。

人が宙を飛ばうと、空が緑色だろうと、モニタから水が流れ出て来ようと、別段おかしいとは思わない。そういうものだと思うている。夢だからいいんだと思う訳ではない。それが夢だという自覚がなくなつて間違っているなんて思わない。それで当たり前だと感じているから疑問に思うことなんかは一切ない。変だなと思うなら、それは夢から醒めかけているということなのであり、つまりは夢と自覚してからあれこれ変に思うのだ。

なら。

本当に夢と現実には差がないのなら。

この現実から醒めたらば。この現実も支離滅裂で無茶苦茶で矛盾だらけで間違いだらけで出鱈目なものだと知ることになるのだろうか。

現実からは目醒められないから、本当は支離滅裂で無茶苦茶で矛盾だらけで間違いだらけで出鱈目なのに、気がつかないだけなのだろうか。

これで当たり前だと思ひ込んでいるだけ——そんな気もする。

来生律子は、油の——たぶん油の匂いを嗅ぎながらそんなことを考えた。

現実も、結構出鱈目なんだ。それはそれで面白いと思うけれども、それも、生きているからこそ思うことなのだろうけれど。

死んでしまったら、そうは思えないのだろうか。

死んだら思うことなんかできないだろう。

それとも、現実から醒めるということが死ぬということなのだろうか。この現実が夢ならば、そうなるのかもしれない。

——どこまでもお気楽だ、自分。

律子は工具を持ったまま、手の甲で鼻の頭を擦った。より強い油の匂いが鼻孔を掠めた。死は、意外に身近にあるものだ。

普段は見えないように目を背けているだけで、考えてみればこうしている間にも人は死んでいる。

興味が無いから知らないけれど、律子がこうしてお気楽に呼吸している間にも、世界中で毎分何十人何百人、何千人何万人と死んでいるんだろう。

そしてその死んでしまった人の数倍、数十倍の人達が、淋しがったり悲しんだり悔しがったり泣いたり落ち込んだりしているんだろう。

——そうなんだろう。

そうなのかなあ、と考えて、律子は工具をボックスに戻した。

三箇月前。

律子は、普通に暮らしている限りは、およそ考えつかないだろう非日常的な体験をした。何から何まで、どう考えたって嘘臭い。夢だと思った方が通りが良いだろう。

律子は攫われて、監禁されて、殺されかけた。

縛られて、台の上に載せられて、刃物を突きつけられた。有り得ない。動物はおろか魚も虫も殺さないという世の中に、絶対に有り得ない。

でも、そんな目に遭った。

律子は死ななかつた。助けてくれたのはエリア警備でも警察でもなかつた。剩え、成年でさえなかつた。律子を救ったのは、律子と同じ年齢の児童だったのだ。

これも有り得ない。

未成年のほとんどは、第三者と積極的に接触することを好まない。

当たり前である。意味がない。律子自身は何とも思わないけれど、物理接触を嫌う者の気持ちも言い分も解る。情報交換はどこにいたってできるし、情報の遣り取りだけで世の中の大半は動いているのだから、不便はない。

人間は、不潔だと言う者もいる。それも理解できる。生き物は、不潔だ。雑菌だらけの場所ですり食したり排泄したり生殖したりする。滅菌も洗浄もされない。血を流したり死んだりもする。清潔にしているといっても、滅菌状態がキープされている部屋で暮らしている者にとっては、不潔だ。

でも——保護区以外では生き物を観ることも少ない。飼育するにも厳重な条件が課せられている。日常的に目にする生き物は、やはり人間だ。

人も生き物なのだから、人は不潔だという意見は正しい。でも、そう思うお前も同じだろうと律子は思う。それは激しく思う。

モニタに映る画像こそが、メモリに蓄えられた情報こそが自分だとも思っているのだろうか。そうした考え方も現在においては真実なのだろうけれど、でも、情報は欠伸もしない嚏もしない。人は生きているから目脂だって出るし涙だって出る。人は汚い。

実際、今、律子は相当に汚れている。

汚いものなんか身の回りに幾らだつてある。自分がまず汚い。そう思えば、大概のものは触れる。だから律子自身は物理接触が嫌だと思つたことはない。でも律子以外のほとんどが嫌がるから、実際のところ他人と直接関わり合うようなことはない。

——なかつた、か。
攫さらわれた時。

律子は同じ年齢としの娘達と、否応なしに関わり合つた。触り合つたし話もした。いや、もつと激しく接触したと思う。生命いのちに関わることだつたから。

目の前で人が死んだ。沢山血が流れ出した。建物が壊れたり、爆発したりした。

そして律子も血を流した。ウルサイ音が鳴る武器で攻撃されたのだ。警察は何も教えてくれなかつたけれど、後で祖父がそれは拳銃だと言つていた。そんなもの、何十年も前に廃止されたんじゃないだろうか。

痛かつた。

いや、みんな痛そうだつた。普通に暮らしていれば、痛いことなんか然そう然そうない。況まして死に直面することなんか全くない。児童こどもなんだし。

痛くつて、死にそうで、実際に屍体したたが転ころがつていて。

そんな中でみんな大声を上げていた。

——やればできるやん。

律子はその時、そう思つた。繊細繊細だつたり過敏過敏だつたり、人はそれぞれなんだろうし、だから好きだとか嫌いだとか、そういう勝手勝手が言いえているうちはどんな在あり方かたでいても構かまわないと思うのだけれど、好き嫌好き嫌いいが言いえなくなつた時にどうするんだろうとは思おう。どんな在あり方かたも正しいし、間違まちがいだとは言いわなければ、コミュニケーション障しょう碍がいという言葉があるように、行き過ぎれば何でも障しょう碍がいと謂いわれてしまうのだし。

触れなくなつて話せなくなつていいから、せめて向き合うくらいはできなくちゃ、人は生き物生きものですらなくなつてしまうような気がする。

——そうでもないのかな。

ツールボックスの蓋ふたを閉める。

油あぶらの匂においが鼻はなにつき始めたら、そろそろ止やめろということだ。律子は前からそう決めていいる。集中しゆくしゆしている時は匂においなんか気きにならない。

手の甲うででもう一度、今度は額ひたいを拭ぬつた。序ついでで二の腕うでを気にしてみる。傷は消えたが、痛いたみの記憶きおくは残のこっている。

少なくとも律子は、逃げ回まわつたり拳銃けんじゆうで撃うたれたりするとう簡単かんぱんには想像さうぞうできないくらい恐おそい思いおもいをしてしている最中さいちゆう——それはもう凶おそろしかつたし、ただ夢中むちゆうだつたと言いつてしままえばそれまでなのだろうし、勿論もちろんちつとも楽しくなんかはなかつたのだけれど——ああ、生きていていると思おもつたことだけは間違まちがいない。

何だかいつもより生きている気がした。一緒にあって怒鳴ったり走ったりしている連中もこいつら生きているなあと思った。そう見えた。

絶対に死ぬなよ——みたいなことを、慥か誰かが言った。

その通りだと思った。

心臓が動いて、血が巡って、呼吸をして、怪我をして血が流れて、それでも声を出したり首を振ったりできるんだし。

でも。

過ぎてしまえば嘘臭い。

そもそも有り得ない状況だったのだし。

——夢。

夢みたいだ。

実際、支離滅裂で出鱈目で無茶苦茶だ。十四歳の一般人の少女が凶器を持った凶暴な悪漢と力を合わせて闘うなんて阿呆らしい話は、今どきフィクションにだってならない。そんなもの配信でもしたら鼻で哂われてしまうだろう。リアリテイがなさすぎる。時代に逆行している。絶対にない。ぐだぐだの夢の方がまだマシかもしれない。

実際、律子の体験は半ばなかったことにされてしまった。

でも。

律子は何となくだけれど、あっちが現実だという想いに囚われることがある。

勿論——データ上はともかく——どちらも現実に違いはないのだけれど。

違い過ぎる。

あの出来ごとより前。そして後。それは実にしっくりと接続している。何も変わっていない。何の起伏もない。均質な日常だ。ただ、あの出来ごとだけが異質なのだ。浮いている。そして、フィクションにしたってリアリテイのない支離滅裂なあの出来ごとの方が、律子にとっては生々しい。

——あっちが本当なら。

今この時こそが、夢である。

気がついていないだけで、この日常の方が実は支離滅裂なのじゃないだろうか。何だか色々間違ってるんじゃないだろうか、

——まあ、多少はね。

目の前の鉄の塊。

前世紀の移動機械である。

律子が生れる前に生産されなくなった機種だ。

何年か前に法律でも走行が全面禁止されてしまったという代物である。

まあ、現在の移動機械の基準に照らすなら何もかも規格外であるから、これは已むを得ないことだと思っけれど、禁止も何も、売られていなければ乗ることもできないだろうと思う。その頃は動く車体が残っていたのだろうか。

今はエンサイクロペディアプログラムでしか観ることができない。実物はない。隣の県の交通博物館に何台か展示されているらしいが、観に行く機会もない。行ったとしても展示物は動かないから、動くところを観ることは不可能である。前世紀のエンタテインメントムービーなどで確認できるだけだ。

バイク、と謂うらしい。

およそこの国の言葉とは思えないのだけれど、英語圏ではモーターサイクルと呼ばれていたらしいから、それが何語なのか律子は知らない。サイクルというだけあって、スポーツアミューズメントの人気メニユーである縦列二輪車に酷似した、二輪の移動機械である。

ただ、縦列二輪車と決定的に違うのは旧式の熱機関原動機が装備されているところである。この武骨な鉄の塊は、燃料を燃やして動力に換え移動する有害で野蛮な昔の移動機械なのである。

これは――。

律子が組み立てた。

まだ完成はしていない――と思う。

概ねそれらしい形にはなったし、足りぬ部品もジャンクパーツを買ったり、アンダーグラウンドなルートから調達したりしてほぼ揃ったから、間もなくでき上がる。

一年かかった。このエリアに転入して来てすぐに取りかかったのだから、その勘定で合っている。

一から作った訳ではない。祖父が昔に乗っていたものをベースにしている。疾うの昔にスクラップになっていたにも拘らず、祖父はどういう訳かそれを捨てずに保管していたのだ。持っているだけなら罪にはならない。況てやまるで動かない、ただの鉄屑である。

引越しの際に捨てるというので――。

譲って貰った。何だか欲しかったのだ。

律子は、こういう原始的な機械が好きだ。端末やモニタなんかは素人には修理できないけれど、この手の機械は直そうと思えば直せるし、そこが何となくいいと思う。ざっと見ただけで何がどうなっているのか理解できる。

まずパーツがでかい。回ったり押したり、役割も単純である。

基板やチップは何が何だか解らない。あれは、要は電気信号が複雑に行き来しているだけなのだろうと思う。人に準えるなら脳だ。

でも、こういう昔の機械は手足である。馬鹿みたいに愚直に運動するのだ。それかしな。そこが、いいと思う。

二三日眺めていたら動かしてみたくなかった。設計図を検索して端末にダウンロードし、それ以前にどういう仕組みで動くのかを知らなければならぬと思ひ、あれこれ学んだ。

もうすぐ動くだろう。動くはずである。でも、動かしたりしたら犯罪なのだろう。公道で乗らなければいいのだろうか。

どうでもいい、と思う。

こんなものが目の前にある日常というのは、やはり歪んでいるし間違っているんだろうなと律子は思う。

普通は、ない。

尤も、前時代的な移動機械に興味を持っていたり愛着を持っていたりする人種というのは少なからず存在する。全世界にいる。ただ大半は自分が嘗てそれを使用していた者——老人か、そうでなくても何故か男性なのである。然もなくば技術者や歴史家などの研究者だ。以前、モーターサイクルに興味を持っているという十八歳の女性がコンタクトして来たことがあったのだけれど、彼女は地球の裏側の人だった。何度か情報交換をしたが、結局はやめてしまった。何だか噛み合わなかったのだ。それも印象に過ぎないのだけれど。

律子は外国語が不得手なのである。

まったく解らなくなつて今は自動的に翻訳してくれるから困ることはないのだけれど、どうも信用できないような気がするのだ。

いや、翻訳ソフトを信用しない訳ではないのだけれど、意味の周波数がズレてしまうような、気持ちの色相がほんの僅か変わってしまうような、独特の違和感があったのである。

同じように、自分の書いたテキストや発した言葉が自動的に翻訳されてしまうのも厭だった。たぶん、こちらの意図も微妙に違って理解されてしまうのだろうと思つた。

それは仕方がないのだけれど。

そもそも律子は文章を書くのが苦手だ。律子が生きている時代に、これはかなり致命的な欠陥だろうと律子自身は認識している。

他の児童は、みな上手にテキストを書く。誤解されないよう慎重に、とても限定的に受け取れる語彙で簡潔な文章を記す。

そのための語彙やテクニクは誰もが豊富に持っている。律子はどうも駄目である。どうしても受け取れるふわふわした文になってしまう。

感謝しているつもりなのに謝られたり、怒っているつもりなのに礼を返されたりする。面倒臭いからそのままにする。それは、音声通信でも映像通信でも、勿論リアルでも大差はないことなのだが。リアルの場合は、まだ勘違いを指摘する気にもなる。

人と関わるのは、だから面倒臭いといえば面倒臭いことなのだ。鉄の塊を弄くり回している方が気が楽なことは確かだ。でも、律子は面倒だから嫌いだという風には思えない。面倒なことの方が面白い場合もあるだろう。

人間は面白い。

あの出来ごとで、律子はその想いを新たにした。

——結局。

行き着くところはあの事件^{イヴェント}なんやねと思う。何を考えていてもいつの間にか思い出している。仕方がないだろう。限りなく嘘っぽくて夢みたいだけれど、あれは。

——事実^{リアル}だ。

リアルだから、人も死んでいる。

データ上はあまり密接に関わりのないものとして処理されているから、たぶん世界中の無関係な人達にとっては幾つかの別のイヴェントとして認識されているのだろうけれど、あの出来ごとは、きつと元々は連続殺人事件の延長なのだろうし。

同じ年頃の児童が何人も殺された。一緒にコミュニケーション研修を受けた子も殺されている。それだけだってショックはショックだ。

それから。

——ナカムラ。

その殺人事件の犯人で、そして別の殺人事件の被害者でもあるナカムラという児童は、律子のよく知る人物だった。

彼は何人も人を殺して、その揚げ句誰かに殺されてしまったのだ——そうである。

何だか。

馬鹿みたいな話だと思う。オフィシャルな記録でもそうなっているようだし、公報チャンネルでもしつこく配信していたから、そうなんだろう。

律子にとっては作り話めいて聞こえる。のみならず、あの生々しい体験とその作り話めいた記録はまるで接続していない。ナカムラの記録は、今の日常と地続きで繋がっている。

だから——それも引^く括^めめて、律子はこの日常を疑っているのかもしれない。

——いいことじゃない。

無根拠に日常を疑うことは、特にまるごと疑ってしまうようなことは建設的ではないと思う。それは自分らしくない。律子はもつと、軽い。軽くて前向きだ。そこだけが取り柄だと自覚している。

「やめやめ」

声に出して言った。

堂々巡りは大嫌いだ。

あまりにも油臭いので、律子は換気装置^{エアチェンジャー}を強にしてワークスペース内の空気を開放許可基準値まで浄化した。それでもあまり変わらないような気がしたので、シールドを上げて、外壁のシャッターまで開けた。

外気が浸入してくる。

外気温はかなり下がっている。取り立てて清浄な空気という訳ではないと思うけれど、その冷たさが清浄感を演出してはくれた。

でも、まだ何だか油臭い。

律子は外に出た。

——ヘンテコだ。

軽くて前向き——。

それって、要するにペラペラで、何か重たいものから目を背けて、深刻な状況に目を瞑って、見て見ぬふりをして逃げてるだけじゃないのだろうか。

ただ、前の方に逃げてるというだけで、逃避に変わりはないのじゃないか。

——仕方がないよ。

みんな、逃げろ、逃げろと謂う。

モニタに映し出される現実も、その現実と地続きを装っている日常も、声を揃えて逃げろと謂う。取り敢えず逃げておけば安全だから。

何かと向き合うのは大変なことだ。

——そうか。

だからみんな、人から逃げるのか。向き合うことは面倒臭くて、時に刃物のように危険だ。痛い思いをしたくないから、遠巻きにしているだけだ。

なら。

自分も一緒じゃないかと律子は思った。

お気楽を装っているだけで、結局逃げ回っているだけなのだ。目を瞑って耳を塞いで——逃げながら笑っているだけじゃないか。それって、すごく恥ずかしいスタイルだ、そんな恥ずかしいことをするくらいなら、堂々と他人に関わるのは嫌いだと宣言している連中の方が潔い。

少し厭になる。

シャッターを閉める。ワークスペースを開放したまま外出するとエリア警備が来るからだ。それはもう、見張っていたのではないかというくらいすぐに駆けつける。

いや、見張っているのだ。ワークスペースには凶器になり得る工具やら薬品やらが常備してある。開放表示のまま使用者端末が敷地内から出た場合、すぐに通報される仕組みである。安全だけれど、煩わしい。

端末を見る。二十三時直前だった。

可能な限り外出は控えるようにとコミュニケーションセンターからは指導されている。何とんでも連続殺人事件からたった三箇月である。

「可能な限りやないもん」

誰に向けてでもなく言う。

油の匂いが堪らなくなったのだから。

「緊急避難やもん」

言い訳がましい。

外気は冷たい。でも、あの粘るような匂いはまだ律子につき纏っている。気の所為だろうか。

空を見上げる。

変な形の月が出ていた。

月が満ち欠けするということを、律子はいく最近まで情報としてしか理解していなかった。事実なんだと思いついたのは――。

――やっぱりの夜なんだ。

あの時、月は目を疑う程に巨きくて、やけに正確に真円だった。

何だか余計につまらなくなった。

歪な天体から視線を下ろすと、律子の視界の端に見慣れないものが混じった。

――人。

が、いるはずはない。

昼間だっていない。

家の向いは小さな緑地帯だ。

A地区――住宅地域とB地区――商用区域の境目にある、公共スペースである。単に区切りとしてあるだけなのだろうけれど、稀に人がいることがある。多くは老人で、ベンチに座って無為に樹木を眺めていたりするのだ。こうした緑地帯では最近珍しくなった野生の鳥類が確認できることもあるらしいから、それを観ているのかもしれない。野生というけれど、生物保護区から逃げて来ただけじゃないのかと律子は思っている。それは野生なのだろうか。

シールドされていたって空は開放されている。犬猫と違って鳥は飛ぶのだから、好きな処へ行くだろうと思うのだけれど、どうなのだろう。

それにしても。

――いや。

あれは人だ。

しかも小さい。律子と同じくらいの児童ではないだろうか。街灯の下にいるのに真っ黒だ。

真っ黒――。

見覚えがある。律子は影のように見えるその人間に歩み寄った。街灯のポールの真下のスチールベンチに座っている。これだけ接近しても消えないのだから錯覚でも幻でもない。

真ん前に立った。

モノクロだ。黒い時代がかったコスチューム。覗いている手も脚も黒っぽいのは、シーステールスキンの手袋とストッキングを身につけているからだろう。アンティークな靴と、髪飾り。顔には半分だけヴェールがかけられている。唯一外気に触れている顔の半分も真っ白で、唇もグレーだ。

「あんた——」

見覚えがあるはずだ。

律子が顔と名前を覚えていた数少ない同世代の人間である。何故なら彼女は、律子とともに拉致監禁され、あの夜を共に過ごした——。

「サクラだよな」

作倉雛子——である。間違いない。こんな衣裳を纏っている児童は、他にいない。

雛子はゆっくりと顔を上げた。

「はい」

「はい——じゃないやろ。何してるん？」

何もしておりませんと雛子は答えた。

「それは観れば判るけど——あ」

この娘は。

「物理接触嫌うタイプだったけ？」

ならゴメンと言った。

雛子はそうではありません、と答えた。か細いけれど通りが良い。ワイヤーの切っ先のよきな声だ。

「本当に何もしていません」

「やりにくいなあ。ま、じゃあ言い直すわ。こんな時間にこんな場所にどうしておるん？ 外出せんよ言われたやろ」

今日、三箇月ぶりに再開したコミュニケーション研修で言われた。通達も来ていた。

「あなた様も外出されています」

「うちん家はそれだから」

律子は顔を向ける。

「家の前におっても外出のうちに入らないやん」

「居住登録してある家屋施設の敷地から外に出れば外出には違いありません。程度の差はあれど違反は違反。それに、危険度に変わりはございません」

「それはそうやけど——」

この娘。

「何か、悪かったかな。あんた、泣いてる？」

「ひあ」

そんな風に見えた。

印象も薄いし、まるで折れてしまいそうに華奢きゃしゃなだけでも、この作倉雛子という娘はかなり気丈だ。あの大混乱の中でも毅然きぜんとしていたし、決してペースを崩くずさずに行動していた。

「マズいところやったら謝る。行けいうなら行くし」

「いえ——」

来生様のお好きになさってください——と雛子は言った。

「そう」

二秒くらい透けるような白い頬を眺めた後、律子は身体からだの向きを変えて、雛子の横にしゃかんだ。

「面倒めんどうだったやろ。暫しばらく」

警察に執拗しつごうく同じことを何度も訊きかれた。嫌という程に検査を受けさせられて堅苦しいカウンスリングを受けさせられて、それからセンターでまた同じことを訊かれた。

雛子は微かすかに首肯うなずいた。

「あんなだけ同じこと話したのに、ちっともその通りになってなかったけどな。テロリストとか、そんなの知らんし」

それはわたくし達のことですと雛子は言った。

「うちらが？ 過激な生命保護主義者団体か？」

「いいえ」

「だよな」

慥たじかに建物を破壊したり管理システムを目茶苦茶にしたりしたのは律子達——正確には律子を含む少女達の中の一人——である。

「やることが目茶苦茶やもんなあ。あの娘」

「あの方は数奇な星回りをお持ちです」

雛子は占いをするらしい。

占いというのは——律子にはよく解らない。

「わたくし達は人質だったようです。連続殺人事件とは無関係むかんけいだそうです」

「人質と違うやん」

「ええ」

人質が犯人なら、犯人はいないことになる。

事件後一箇月くらいは国中が大騒ぎで、それからも暫くは落ち着かなかった。

コミュニティセンターも半なかば閉鎖状態だったらしい。手続きやら人事やら、各方面への言い訳やら、そうした事情があったのだろう。今日研修が再開され、事件から三箇月ぶりに律子はあの夜の参加者達と会ったのだ。

でも研修ではひと言も口を利かなかった。
それで当たり前だから。

それまでもそうだったのだし。変わってしまった訳ではないのだ。あの一夜だけが異質だ
というだけなのだ。

夢みたいやねと言うと、夢ではありませんと言われた。

「そうなんやけど」

「夢は——もっと安らかなものであるべきです」

「それもそうだけど」

「それに」

そこで雛子は言葉を切り、下を向いた。

それから力なく手を上げて胸の辺りで止めた。

——ペンダント？

では——ないようだった。雛子は首から提げた何かを握り締めていた。

「何？」

「何でもありません」

「いや」

それが何か尋ねた訳ではなかったのだが。

雛子は、ずっと握っていたその何かを放した。

それは一度すつと胸の辺りまで下がった。

雛子はそれを細い指先で抓んだ。

少し持ち上げる。

それは。

小さな塚——に見えた。

中には液体が入っている。

アクセサリーなのだろうか。

そういえば、あの夜も提げていたっけ。今日の昼間も提げていたっけ。

いや——覚えていない。

人を観る癖がついていない。

観るだけで訴えられることもあるし。

月光とLEDのミックス光が一瞬差し込んで、その塚の中身はぬらぬらと瑤々しく、しか
し妖しく輝いた。

「これは——」

これは毒ですと、雛子は言った。



何だか背徳い。

橡 兜次は頭を掻いた。

まるで――。

変質者という単語が頭に浮かぶ。今はそんな呼び方はしないのだろう。ストーカーという呼び方はまだ有効なのだろうか。前世紀生れは何につけ一度考えなければ、発言も行動も迂闊にはできない。

しかし、橡の語彙では変質者なのだ。独り暮らしの少女の家の前に突っ立って、ただ帰りを待っている中年男は、変質者だろう。それ以前にアポイントも取らずにリアルアクセスを求めような行為は、下手をすれば犯罪にもなり得る。強要などせずとも拒まれてしまえばそれまでである。

――まあ。

あの娘なら大丈夫だと、橡は思っている。

神埜歩未。

狼。

自分は狼だと言っていた十四歳の娘。

橡は四十数年だから生きて来たけれど、あれ程真っ直ぐな眼差しを向けられたことはなかった。向けられていても気づかなかっただけなのかもしれないが、そもそもリアルアクセスを仕事にして来たというのに、橡は他人の眼を覗かないのだ。

橡は、臆病者なのである。

建物を覗る。土地の勾配がきついのと、隣家との距離がやや離れていて宅地間に緑地帯が割り込んでいることを除けば、ごく普通の規格住宅である。

ただ。

屋上に違法な増築部分がある。歩未自身がそう証言し、また他の少女達も口を揃えてそう言った。裏は取れているはずなのだが、確認はされなかった。

――いや、したのだろうか。

無視したということか。

現に、ある。公道を挟んだ位置から目視できる。別に隠している様子はない。一見ペンントハウスのようでもあるし、奇異な景観という訳でもないから見逃しがちなだろうが、観る者が観れば規格外とすぐに知れる。

屋上の建物は、本体住宅と接続していない。

現行の法律では独立した空間を構成する構造物には個別のセンサを設置することが義務づけられている。入室者の有無は総ての出入り口に設置されたパネルに表示される。セキュリティリンクが住宅基準以上の場合に入退出にID認識が必要になる。

屋上の部屋は明らかに規格住宅建築後に増築されたものである。下が典型的な規格住宅だから余計に判ってしまうのだ。そしてあそこは、たぶん下の住居部と繋がっていない独立空間だ。素人目にもそれは判る。観る限り内部に開口部を設けて建物同士を接続することは難しいものと思われる。住宅の屋根と天井をぶち抜いて梯子でもかければ可能なのかもしれないが、それこそ建設許可は下りないだろう。

あれは、住宅の外に建てられた別個の建物なのだ。

ならば——モニタ上には重なった二軒の建物が表示されるはずである。だが、端末で確認する限りそうなっていない。センサがないのだ。構造体としての安全基準はクリアしていても、法的な基準をクリアしていない。確実に違法建築である。

歩未本人もはっきり違法と認めている。建造したのは現在海外赴任中の保護者——姉であるということだった。

普通なら。その保護者に確認を取り、更には現場確認をした上で、撤去命令か改善命令がなされるはずだ。保護者にもそれなりの法的処分が下されるだろう。

何もなかった。

——嘘か。

嘘だと謂うのだ。

——嘘じゃないじゃねえか。

見えている。楡は一時間おきに都合四回この場所に立って屋上の建物を観察している。何度見たってある。夢でも幻でもない。

端末を確認する。

二十三時になろうとしている。

家の方には在宅表示が出ているから、歩未は必ず家の中にはいる。そちらを訪ねれば面会はできるだろう。いや——。

——流石にもう遅いか。

最初から、普通に訪問するという考えはなかったのだ。訪問記録が残るのは好ましくくない。楡自身は今更になっても構わないのだが、歩未に迷惑をかけるような事態になることだけは避けたかった。

あの屋上の部屋でなら記録を残さずに面会することができると。敷地内に端末を持ち込みさえしなければいいのだ。だから楡はアポイントも取らず、変質者のように見張っているのである。

椽は、警察官だった。

あの――。

三月前の、遣り切れない目茶苦茶な事件に自ら関わり、椽自身が目茶苦茶になって、そして。

――ん。

明りが点いた。

――いつの間に上った。

そもそも、あの建物にはどうやって上るのだ。屋外に階段があるとか言っていたか――。

「刑事さん」

耳許で突然声がしたので、椽は首を竦めて飛び退いた。囁くような小声だったというのに。

背後に歩未が立っていた。

「あ、いや」

「何か用ですか」

駄目だ。この眼は。

――草臥れた中年には辛え。

椽は目を伏せた。

「こ、神埜――さんか」

「歩未でいいです」

「ま、いいよ。お前さん、いや」

明りが点いたのは声をかけられる数秒前だ。瞬間移動でもない限り、これは不可能なことだ。

他に誰かいるのかと尋いた。

「僕は独りです。姉は今、情勢の不安定な国にいるので、当面帰国できません」

「じゃあ」

タイムーをかけたと言ったと歩未は言った。

「タイムー？」

「二十三時に明りが点くようにしておいたんです」

「な、何故そんなこと」

「僕に用があるのじゃないかと思っただけです」

用は――ある。

「しかもあまり褒められた用じゃないだろうと」

「俺は――褒められた人間じゃないからな。それにしたって――」

「端末は？」

「いや、そりゃあ」

「ここに置いておくつもりだったんですね？」

見切っている。慥かに、椽は面会する際には端末をこの街灯の下に置いておくつもりだった。疑われた時の用心である。

データ上まったく移動していないことになるから大体すぐにバレるのだが、そもそももうずっと動かずに突っ立っているのだし、ストーカー状態が多少長引いたとしても椽にとっては同じことである。

ただ、歩未と面会していない、という言い訳はできる。咎められたら、変質者のように突っ立って何時間も眺めていましたと言えばいいのだ。そうすれば歩未はただのストーカーの被害者になる。椽は少女につき纏う反社会的嗜好支配型犯罪者になるのだが。

既にそう思われているようだからいいのだ。

じゃあ置いてくださいと歩未は言った。

「ああ？」

「早く」

椽は自分の端末を街灯ポールの台座の歩道側の端にそっと置いた。GPS探査をかけられなくても、これなら誤差のうちである。

歩未は既に歩き出している。家とは反対の方向である。

「おい」

「こつちへ——と歩未は言った。

緑地帯を抜ける。

「おい、道を歩けよ」

「歩けるところは道です。この手の行動が苦手なのでしたら謝ります。そうは——思っていないかったですか」

「まあな。別にいいが」

そういえばこの娘と初めて会った時、椽は泥だらけだった。

「その路地を抜けて、坂上の道路を横断してしまえば、後は緑地だけを通って家の裏に出られます」

「何でそんな遠回り——」

まさか。

僕は監視されているようですと歩未は言った。

「監視って——誰に？ 警察にか？」

「さあ。知りません」

「何故判る。いや、どうして判った？」

「集像機が設置されました」

「そんなものどこにだって——」
いや。

新規設置は然う然うされるものではない。

街頭集像機は都市管理ネットワーク機構が一括管理しているが、新規設置には国土交通省と地方自治体双方の許可が要る。新規設置にはそれなりの理由が必要になるし、各地区のセンサーが設置申請をしても認可されるまでには相当の時間がかかる。

橡の記憶が正しければ、この周辺の集像機台数は住宅地区の標準を最初から満たしている。当該地区で凶悪犯罪が発生し、多数の犠牲者を出したという事実は新規設置の理由たり得るけれど、事件発生が三箇月前であることを考慮するなら、このタイミングの設置は早過ぎる。

「何処どこにいったんだ。その集像機は」

「今通って来た緑地帯の中です」

「は？」

「家の正面に向けられています」

「あなたの家——か？」

「もう一箇所、裏手の緑地帯にもありました。でもこのルートは死角になっています」
橡は見渡す。

何も見えるものはない。

「よ、よく気がついたな、おい」

「草や木はLED光を発しません。屋上から観れば人工的な発光体はすぐに判ります」
タリーランプか。

あんな小さな光も見逃さないのか。この娘は。

「ただ、僕が気づいていない集像機があったとするなら、こんなことはすべて無駄なんですけど」

人生は無駄でできてんだと橡はどうでもいいようなことを言った。

「無駄でもな、足掻あがいてみた方がいい時つても偶たまにはあるもんだよ」

歩未は応えなかった。

「それより、どうしてあなたが監視される」

歩未は立ち止まり、振り向いた。

「知りません」

「まあ——そうなんだろうが」

「僕は嘔吐おうとき——らしいですね」

「あ？ ああ」

虚言癖きげんへまあり。

そう。この娘の言うことは全部嘘であると、当局はそう判断したのだ。
——判断、じゃねえか。

嘘であることにしてしまっただの。その方が都合が良いことが多かったからに外ならぬ。昔風に言うなら大人の事情、要はデータの捏造だ。

「僕を信用してくれた人もいたようです」
「信用？」

「はい。僕が嘘を吐いていないのなら——僕は何人も人を殺した、反社会的人物です」
監視されて当然でしょうと言って歩未は再び前に進み始めた。
そう。

この娘は。
殺人者だ。

「しかし、個人宅を監視するってのは」

「いいんです。僕は、少し——いや、かなり」

安心していきますと歩未は言った。

楢は躓きそうになる。

「そりやまた何でだ」

「人を殺すのは」

悪いことです。

「悪いことだと、不破さんに教えて貰いました。僕はその言葉を信じています。僕は」

悪いことをしました。

「悪いことをしても罰して貰えないのは」

悲しいですから。

そうだろうな。

罰してくれと、この娘は何度も楢に言った。楢には何もできなかった。

「監視が——罰ということか」

「いいえ」

「まあ——そうだな」

それは軽過ぎる。

この娘はそう思っているに違いない。

慥かに、現行法に照らすなら、情状酌量を加味しても限りなく終身刑に近い量刑となる——だろう。法律に疎い楢でもそのくらいは判る。この少女は裁いて欲しかったのだ。

ただ——歩未は前を向いたまま言った。

「何かあった時に」

そこで突然に大きな公道に出た。

椽がずっと突っ立っていた坂道の上の方になるのだろう。娘は足早に横断する。椽は追う。道を渡る途中、歩未は言葉の続きを口にしたのだけれど、椽には聞き取れなかった。誰かが止めてくれるような気がして——そんな風に聞こえたような気がしたのだが。

誰か。
何を。

止めると言うんだよ。

そのまま住宅の脇を抜けて、更に深い森に入る。

——いや、森じゃない。

そんな気がしているけれど、これは森なんかじゃない。他よりは多少大きな樹木があるというだけの、貧弱な緑地帯でしかない。歩行に適した舗装がなされていないから、歩きにくいだけだ。

「この上にもうひとつの集像機があります」

歩未は上を指差す。

椽も見上げたが、何も見えなかった。

街頭集像機は歩行者から見えるように設置するという決まりがあったはずだ。本当にこんな場所にあるのだとしたら、つまりは非合法——いや超法規的な設置、ということになるだろう。

「本当にあるのか」

「さあ。僕は——嘘を言っているつもりはないのですが、どうやら虚言癖があるらしいので、嘘なのかもしれません」

——嘘な訳はないか。

この娘が真実狼ならば。

嘘は吐かない。

獣は嘘なんか吐かないだろう。

しかし。

「おい。室内はどうなんだ。例えば盗聴は」

——しないか。

意味がない。盗れたとしても生活音と独りごとである。

メールも音声通信も画像も、意図的に消去しない限りは一定期間保存されるのだし、訪問者もすべて記録される。そうしたデータを掠め盗る方が、遥かに楽だし確実だろう。集像機を設置できるくらいの機動力や政治力がある者ならば、その辺は確実に押さえているはずだ。

どこの誰かは知らないが。

——誰だよ。

「誰だ。あんたに目をつけてる奴は警察か。それとも想像できない。」

「僕の言葉を信じてくれた人であることは間違いありません。僕は、端末を家に置いたまま、データ上は屋外に相当する建物で寝起きたりしていると証言しました。ただ僕の言葉は信用に足るものとされず、証言としては採用されませんでした。が——」

「それを信じるなら不在表示は当てにならないということになるな——」

いや待て。

「しかし、そういえばさっき、在宅表示は出ていたぞ。どうやって出た」

「IDを使わずに出る方法を習ったんです」

「は？」

ともだちに——と歩未は言った。

「あの、天才少女か」

水準を遥かに上回る世界的に優秀な頭脳を持った、少しばかり調子の外れた娘——。

「都築とか言ったか」

歩未は答えなかったが、間違いないだろう。

「いつ習ったんだよそんなこと」

「正確には——真似をしたんですけど。だから」

「在宅表示も当てにならない——か」

実際に在宅中のデータは盗れるとしても、屋上の建物はノーマークな訳だから、監視するなら取り敢えずはそこ——ということになるだろうか。

とはいうものの。

今、歩未はそのどちらにもいない。

端末は住宅内にあるのだろう。だから公式な記録の上で、この娘は現在自宅の中にいることになっている。一方、集像機が捉える画像上では、屋上の建物の中にいる、ということになるのか。

どちらも嘘だ。

「ふん」

何もかも嘘だなと言った。

嘘吐きですからと歩未は答えた。

「期待に応えているという訳かい」

「刑事さんに迷惑をかけないためです」

「あ？」

「もし、僕が声をかけなかったら、刑事さんはどうしていました」

「どうしていったって——」
「どうしただろう。」

どうであれ、屋上の建物に明りが点いた段階で歩未が上にいる、と判断しただろう。外から屋上に上ることができるといふことは聞いていたから——。

「まあ、門を潜るか塀を越えるなりして、敷地内に入っていただろうな。トラップもセンサーもなさそうだったから——」

それでは。

「そうか。写るのか」

一台目の集像機に捉えられてしまうのだ。

「僕の証言を信じている人達にとって、僕は殺人犯です。その殺人犯と非公式にコンタクトをとったとなれば——」

「おいおい」

迷惑をかけたくないと気を遣っていたのは橡の方であつたはずである。結局、氣遣われていたのは橡の方だったのだ。

「いつから気づいていた」

「二十時」

最初からか。

「何故判った」

「窓から観ただけです」

観たところでどうにもできないだろう。

「一時間後にも姿が見えたので」

察したのか。

「最近は、毎日二十三時くらいに屋上に上る習慣になつていたので、二十二時の段階で在宅表示にしたまま家を出て、一時間後にライトが点灯するようにタイマーをセットして、それから」

「あそこで俺を待っていたのか」

手数をかけたなと言った。

「着きました」

「ああ」

慥かに橡が眺めていた規格住宅だ。

近頃は見掛けなくなつたスチール製の螺旋階段が設えてある。

「真裏——になるのか」

「ここも——死角になつていふのだ。この階段を写そうとするなら、隣家に集像機を設置しなければならぬだろう。流星にそれはできなかったのか。」

「上がって大丈夫か」

「うろろうせずに真っ直ぐ建物に入りさえすれば」

そう言った歩未は既に階段の中程にいた。

「いや、そういうことじゃなくてだな、まあそういうことでもあるんだが——その、俺なんかが入っても構わないのか」

「嫌ならこんなことはしません」

「まあそうか」

わざわざ導き入れてくれているのだ。

橡の背徳うしろめたさは更に増加した。画えも音とも録られていないのは承知していたが、それでもこそとした動きになる。まさに抜き足差し足の体ていである。まるで昔の泥棒だ。

屋上が見えて来る。

橡は顔だけ出すようにして見渡してみた。

我ながら臆病だと思う。どうなつてもいいと思っていたというのに。

違法建築の入り口は開いていた。

歩未の言っていた方角に集像機があるのだとすれば——この階段の上がり口からあのドアまでのラインは写らない。建物自体が邪魔をしている。橡は階段を上り切り、ふやけた体軀を縮めるようにして、こそごと足早にドアへと向った。おそろしく恰好が悪い。

ドアを抜けると、そこで座つてくださいと言われた。入り口の横に椅子が置いてあった。

「窓から見えない場所です」

「用意がいいな」

賢いのだ。この娘は。

ずっとそこにあるんですと歩未は言った。

座つて、前を向いて、橡はぎよつとした。

部屋の中に金網が張つてある。

「は、鳩か？」

「ええ」

「鳩がいるのか。いや、他の娘達も鳩がいるんだとか言っていたが——本当にいるのか」

「嘘だということになっていきますが」

「飼育している——訳ではないんだな。慥たじか、勝手に棲すみついたんだとか」

そう聞いた。

鳩を見たのは何年ぶりだろう。橡が若い頃は至る処にいたものだ。鴉かみすより、雀すずめより数が多かった。今は一部の宗教施設——鳩自体を信仰の一部と捉え飼育許可を取つて餌づけえをしている神社など——を除けば、見かけることも少ない。

「こんなもの、よく棲みついたもんだな」

落ち着きのない動きだ。

それに、人を拒絶するような眼だ。

頻繁に目にしていた頃はどうとも思わなかったのだが、間を空けて改めて観ると、気持ちの悪いものである。

「居心地が——良かったのか」

「追い払わなかっただけです」

「そうなのか」

保護と共棲は違う。

現在、この社会に於て保護とは要するに隔離のことなのである。住宅地区で野生動物が発見された場合、速やかに各コミュニティの環境衛生課への通報が義務づけられている。通報すると即座にエキスパートが派遣され、動物は捕獲されて生物保護区へと送られることになる。絶滅を防ぐため——だそうだ。実際、絶滅危惧種だった雀は、それで生き延びたらしい。害が出れば獲り、減れば隔離して増やす。懐けば愛玩し、噛めば殺す。

——何様だ。

そう思う。

「観たところ鳥類飼育環境基準を満たしているとは思えないが、それでも平気なものなんだな」

動物は不平なんか言いませんと歩未は言った。

「生きるために順応するだけです。順応できなければ死にます」

「死ぬ——か」

「ええ」

そんなものか。

「こいつらは、勝手にしてるだけなんだなあ」

「生きています」

生きていればそれでいいんです。

過不足はない、ということだろう。

椽は暫く呆けたように鳩を観ていた。

「ところで」

鳩を観に来たんですか刑事さんと言って、歩未も椅子に座った。

「あ——そのな、まず、俺はもう、刑事じゃないんだよ。公務員は辞めたんだ」

「免職ですか」

「ははは。残念だがな、一応は自主退官だよ。喜ばれたがな。もうちょっと粘ってたら解雇されてたと思うが。ま、俺もあんた同様、蓋ア開ければ嘔吐きになってたからな。いや」

椽の場合は納得ずくである。

褒められたことではないと思うが、慥かに、社会的な影響を鑑みるに、橡の知る事実を公表することが良い結果を生むとは思えない。

「俺は証言を翻した。日和ったんだ。警察が用意した一番無難な筋書きに乗ったんだ。ま、全部嘘だかな」

嘘を吐くことで橡は正直者になったのだ。歩未とは正反対である。

変節も隠蔽も処世の内である。それで何かが上手く行くというのなら、嘘も方便だと思う。橡如きが曲がるのが誰かの安寧のためになるというのであれば、橡は発言も撤回するし意見も変える。嘘八百でも並べ立てる。信念さえ捨てる。己が曲がって済むのなら、幾らだって曲げる。

だが――。

データそのものが改竄され、消去され、捏造されてしまうことには、少し――いや、かなりの抵抗があった。せめて訂正という処理はできないものかとも思ったのだが、橡の知る真実と用意された筋書きは乖離し過ぎていたのだ。およそ勘違いや思い違いで済まされる差異ではなかった。曲げたことすら消されてしまった。

――仕方がないか。

仕方があるまい。橡は嘘を吐いたが、吐いた相手は自分だ。橡はまず自分自身を偽ったのだ。一方歩未は、誰に対しても嘘は吐いていない。

だから嘘吐きにされた。

おかしい話である。橡は、腹芸の通じる目の曇った大人だったというだけなのだ。

少女達に腹芸は通じない。他の少女達の発言は単に信頼性に足るものではないと判定された。極限状態において正常な認識ができていなかったに違いない――というのである。実際のところ、彼女達の証言は感情的かつ主観的で、またとっ散らかってもいたようである。

ただ、歩未一人だけはブレていなかった。主張は首尾一貫しており、齟齬もなかった。

だから嘘吐きにされたのだ。

皮肉なものだ。

「まあ――俺はな、だからもう公務員でも警察官でもないんだよ。つまり何の職権も行使できない。あんたにも強要はできない。帰れというなら帰る」

「用はないんですか」

「いや――」

ある。

あるから来たのだ。

「まあ、刑事生活が長かったから、物理接触に関してはナイーブなんだよ。経験上、まず九割は嫌がられるから。況て強制面接権のある刑事でもなくなった今、人が会ってくれるかどうか」

「もう会っています」

大人は手続きが多いですねと歩未は言った。

「あなたが刑事かどうかは、僕にとって大きな問題ではありません」

「そうだな」

「僕が人殺しであるとはあなたは知っている。だからあなたは」

そこで歩未は言葉を切った。

「そうだな、と椽はもう一度言った。」

「じゃあ、嘘の世界の任人だよ俺は」

それでいいなと言うと、歩未はよく解らないというような、この娘にしては珍しい表情になった。

「尋きたいことがある」

どうしても尋けなかったことだ。いや、これから先も尋くことはできないだろう。機会は一度だけだと椽は思っている。そう決心したからこそ、変質者紛いの行動を起こしたのである。

「俺は、まあこの前の事件には一応司法警察官として関わった。だから記録上は間違いや嘘とされるあんたらの証言も知っている。加えて、俺は現場にいたんだからな。それが間違いでも嘘でもないと知っている」

だから。

呼びにくい。児童だからといって見下すような呼び方はできない。なら同等に扱う。それしかない。

「あんたの得物」

「エモノ？」

「ああ。あの変わった形のセラミックナイフだ」

凶器——というべきか。

「まだ持ってるな」

「没収して欲しかったですが」

歩未は部屋の隅に置いてある頑丈そうな黒いケースに目を遣った。

「あれをあんたに渡した男——南北線の百十九エリア第三ゲート付近であんたを襲ったという暴漢」

「僕が——殺した男ですか」

「そう」

この娘が殺した男。

「それは——」

俺の友達かもしれねえと椽は言った。

「ともだち」

「そういう言い方は今しねえよな。いや——あんたさつき言ってたか。まあ、児童の頃
な、仲のいい同級生——や、俺の時代はまだ学校ってシステムがあったんだよ。クラスも一
緒で気も合った。そいつがな、小さい女児を殺して、それから自分の家族皆殺しにしたん
だ」

——あいつ。

霧島タクヤ。

「その男、俺と同じくらいの年齢だったか」

歩未は真っ直ぐに橡の方を向いている。髪が少し伸びただろうか。それでも橡より短い。

「思い出したくないこと——かな、なら」

当たり前だろう。

いや、すまん——と言うと、忘れたことはありませんと歩未は応じた。

「だから——思い出したくないなんてことはありません。思い出せない訳でもないです。た
だ、見た目で年齢までは判りません。そうだといえばそうだったかもしれません」

「そうか」

「ただ、三十何年前に女の子を殺して、家族も全部殺して、でも罪にはならず病院に入れら
れたと言っていました」

なら。

「そりゃあこいつかな」

橡は用意してきたグラフィック再生フィルムを広げ、歩未に向けて翳した。

「それこそ三十年以上の画像だな」

歩未は。

一瞬だけ、信じられない程に悲しそうな顔をした。橡は眼を細め眉根を寄せた。自分がど
れだけ酷いことをしているのか、思い知ったのだ。

「すまん」

言葉がない。

「似ています」

歩未は淀みなく答えた。

「僕が」

殺した男の人に。

「そうかい」

あいつはこの娘に。

「あいつは——何と言っていた」

「謝っていました」

「襲っておいてか」

「いきなり覆い被さって来て、逃げようとしたら殴られて、蹴られて、組み伏せられて、刃物を突きつけられて、それから大きな声で怒鳴られました。何を言っているかは全然解らなかつたけれど——」

「そらあ怖かつたろうな」

「どれだけ恐ろしかったか。」

「でも、僕が泣いて叫んだら、そのうちその人も泣き出して、そして」

「謝ったのか」

「歩未は首肯した。」

「自分はおかしいんだと言っていました」

「おかしい——か。」

「病院に入れられて、治療されて、大丈夫だと言われたけれど、全然治ってないと」

「治ってねえ——なあ」

霧島は行動障 碍児童と判定され、精神鑑定も行われた。その結果、犯行時責任応力はな
いという判断がなされ医療施設に収容された。

それ以前にその昔——未成年は刑事罰を受けないという時代があったのである。

「治ってねえとは」

「人を殺したくなる——そう——言っていました。人を殺すのは良くないことで、絶対にし
てはいけないことで、それは充分に解っているから、だからその満たされない、それでも抑
え切れない気持ち、ナイフを持ち歩くことで抑え込んでいたんだと」

「人を殺したくなる——か」

「そうなのか。」

「そうなのか霧島。」

施設を退院した後、霧島の行方は杳として知れなかった。尤も、真剣に捜した訳ではな
い。捜し出して会ったところで改まって話すことなどない。仲のいい友達ではあつたけれ
ど、言い換えればそれ以上の関係ではなかった。向こうも迷惑だろうと思つた。

どうして霧島があんな事件を起こしたのか。霧島と自分のどこが違うのか。もしかしたら
自分もあいつと同じではないのか。そうだとしたら自分も人を殺してしまうことがあるの
か。いや——。

「その。」

「その煩悶が、椽を刑事にしたのだ。」

「殺したくなると——言っていたのか」

「はい」

「殺人衝動——ということか」

そんなものがあつたのだろうか。そうなのか。

「その人を僕は殺しました」

歩未はそう言った。

そう——だったな。

「いや、その」

「僕は人を殺したくなることなどありません。殺すことで満たされるようなこともない。だから、あの人の気持ちは解りません」

「そう——なのか」

「はい」

「殺したくて殺した訳じゃあないんだよな」

「はい。ただ」

ただ、僕は殺してしまつたんです。

「刃物を振り下ろしてしまつたら、もう取り返しはつかないんです。嘘にされてしまつたけれど、僕は人殺しです。決してしてはいけないことをした」

「解ってるよ」

大人は見ても見ぬふりばかりするけれど。

俺だけは解ってるからよと椽は言った。